



「共同運動」

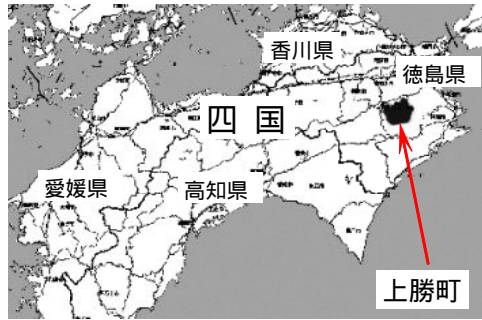
市民団体や労働組合でつくる「茨城共同運動」と県庁内全部局との交渉懇談が今年も3日間にわたっておこなわれています。(県庁内会議室、7/11、12、18)

「葉っぱビジネス」を視察

身近なものや手仕事に価値を見つけ、それを事業に 山間の町で

7月10日～12日、市議会の文教厚生委員会では、行政視察で徳島県上勝町と香川県高松市を訪問しました。鈴木やす子議員の「葉っぱビジネス」のレポートです。

徳島県上勝町は、四国山地の山あいの町です。棚田も住居も工場も、町そのものが谷あいにはばりついているという風景のなか、人口は現在約2千人です。視察テーマは「葉っぱビジネス」。「葉っぱがお金になって年収2億円以上」とマスコミでも注目されたのでご存じの方もいらっしゃるでしょう。上勝町は、もともと林業



とみかん栽培が盛んでしたが、いずれも輸入自由化や産地間競争の波をかぶりまわした。さらに、81年におそった零下13℃という寒波によって、みかんの木がほぼ全町で枯死という未曾有の危機に見舞われます。町は、農業再編に取り組む、軽量野菜を中心に栽培品目を増やしていくことやシイタケ栽培にも着手していきます。そういう中で、



食事したお店の一角。町内の観光パンフなどにまじって「さよなら原発徳島集会」案内のチラシが。笠松和希・上勝町長は「脱原発をめざす首長会議」に参加していることを思い出しました。

特に高齢の女性がとくめめるものがないか、と一人の農協職員の発案でこの事業ははじまりました。「葉っぱビジネス」とは、日本料理の皿に添えられる季節の葉や花を販売する事業です。それまでは料理人が自ら手に入れていたもので、販売ルートを開拓するための営業も、ニーズに合わせて品ぞろえをすることも、まったくの手探り。失敗を重ねながら、商売として成功させていきます。

現在は第三セクターとして事業はすすめられていまして、説明をしてくれた職員がどなたもイキイキとしゃべり話されていたことが印象的で、これからの課題にも果敢に挑んでいかれるのではと感じました。

身近にある何気ない葉っぱ、そして自分たちの手仕事に豊かさや価値を見出し、それをお金につなげる取り組みには、暮らして商売をつなげる原店を感じました。ドラマの題材としても魅力的なんでしょう、映画化されこの秋に公開の運びとなっています。(吉行和子さん主演「いろどり」)

20数年の間には、市場での価格の変動もありました。人材をかかえ企業として継続させていくこと、生産者の収入の格差、後継者の課題など、難問も少なくありません。一方で、高齢化率が約50%、過疎化もすすむなか、お年寄りが生きがいをもって元気に働く場所を作り出していることの意味はとて大きいと感じました。医療費が県内一低いということも、自立し、住み続けられる町づくりに貢献していると思います。



ご相談は
お気軽に

市議会議員
福田 明
43-0468

市議会議員
鈴木やす子
42-2462

日本共産党
北茨城市委員会
磯原町豊田1030-2

毎週 日曜日 発行
市議団ニュース

「野口雨情 名作の底に流れるもの」を読んで 福田 明

著者の奈良達雄さんは、雨情研究の第一人者です。雨情の数々の詩を若き雨情の思想的な出発点となった社会主義的な思想から捉えることによって、より詩の深みが読むものの胸に迫ってきます。

弱者にたいする心情が名作には共通して流れていますが、特に子どもへの愛情は特別な感じがします。著者は「ナマな言葉で論理的な主張を展開するのではなく、読む人を感動させ、共感を誘い、深く考え

させる詩を書くこと、つまり文学的形象化をはかることで・・・雨情は詩人として大成するきっかけになった」と述べています。

同書で紹介されている数々の童謡のなかでも文学的形象化と抑揚の効いた「人買船」や「赤い靴」が私は特に好きです。また、これまで雨情が亡くした子どもへの悲しさを歌ったと思われていた童謡「シャボン玉」の解釈は俗説で、実は雨情の童心あふれる

楽しい作品であることも紹介されています。

雨情の情感漂う詩には、雨情自身、社会の矛盾を感じながらも、実践まではともなわれない弱さと、せめて詩の中では自分の心情に忠実でありたいと願う純真さが相まって、よけい心に染み入る気がします。

同書を読んで、雨情の詩に、いわさきちひろの絵を添えたら、より深みが増すだろうと想像しました。



(東銀座出版社・本体476円+税)